

学校教育講座 大西 賢治 准教授



心やさしさの発達とその起源

キーワード 利他性/ 向社会的行動/ 共感/ 互惠性/ 発達

どのような研究をなぜ行っているか

人は困っている他人を見ると、たとえそれが自分の知らない人であっても助けてあげたい衝動にかられ、多くの場合、親切にふるまう性質を持っている。このように他人に対して発揮される人の利他性は動物界でも大変特異的で、生後初期から見られる。人が持つ高い利他性は、人という種の進化や、社会の維持に重要であると考えられてきたが、どのような仕組みによって広範囲に及ぶ親切の交換が維持されているのかは大きな謎とされてきた。この謎を説明するために提唱されたのが、評価型間接互惠性と呼ばれる仕組みである。この仕組みは、ある人が他者に親切にふるまう(向社会的行動)ところを第三者が見ると、親切を行った人の評価が高まり、第三者から選択的に親切にしてもらえするというものがある(図1)。

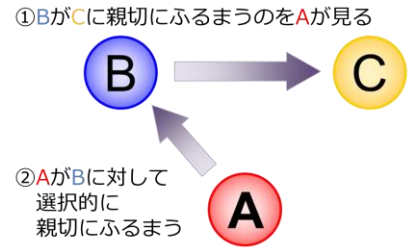


図1: 評価型間接互惠性の仕組み

私達は保育園において5・6歳児を観察し、幼児は、ある児が他児に親切にしたのを見た後に、親切にした児に対してより利他的にふるまうことを明らかにし、評価型間接互惠性が日常場面で成立していることを世界で初めて示した(図2)。この結果から、他者に親切にすれば、まわりから報いがあるという「情けは人のためならず」ということわざと同じルールが幼児期から日常生活で働いていることが示された。



図2: 幼児における評価型間接互惠性の例

私達は現在、幼児の向社会的行動交換に働いているルールをより細かく検討し、それらがどのように発達するのかを研究している。また、幼児の利他性が幼児期の仲間関係の形成においてどのような役割を果たすのかを分析している。

さらに私達は、国際的な共同研究により、人の利他性の特徴・発達をその他の霊長類と比較する研究を実施しており、人の利他性の起源についても研究を行っている。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

現在の幼児教育では、幼児期に育みたい資質・能力に基づき、ねらいを持って保育が計画されている。この資質・能力をより具体的に示した「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」は、保育の現場で共有され、幼児のどのような姿を引き出す保育が必要かの指針となっているが、その中には「協同性」や「道徳性・規範意識の芽生え」など、幼児期の利他性、向社会性、共感を基盤とする姿が示されている。幼児期に心やさしさがどのように発達するのかを示し、それらが幼児期の仲間関係にどのような影響を与えるのかを示すことで、「協同性」や「道徳性・規範意識の芽生え」といった姿がどのような経過をたどって現れるのか、それらの姿を引き出すためにどのような活動が重要なのかを示すことができる。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- ・ 2022年度 奈良県立高田高等学校 教育アンビシャスコース「教育探究 I」 出張講義 講師 (幼児教育)
- ・ Short-term direct reciprocity of prosocial behaviors in Japanese preschool children. (2022) *PLoS ONE*, 17(3): e0264693.
- ・ 2020-2022年度 園内研修における指導助言や講師
奈良教育大学附属幼稚園「トキメキ・ヒラメキ・子どもの思い～探求し、思考する保育を目指して～」等

